

編集部・弓山達也（大正大学助教授）、高橋原（国際宗教研究所研究員）、広池真一（国際宗教研究所研究員）

【出席者略歴】

湯澤貞（ゆざわ ただし） 昭和四年、栃木県生まれ。三年、國學院大學文学部宗教学科卒業。三二年、明治神宮奉職。五四四年に明治神宮禰宜。國學院大學文学部兼任講師。同神宮祭儀部長、総務部長兼役員室長などを歴任し、平成二年から靖国神社禰宜。責任役員・権宮司を経て、九年五月、代表役員・第八代宮司に就任。一六年九月に退任。日本会議代表委員なども務めた。俳誌『若葉』同人。俳号は碧水で、句集に『散る櫻』（近代出版社、平成一六年）がある。代表作は「やすくにの静かに仰ぐ櫻かな」。

在任中に小泉内閣総理大臣の、平成一三年より一六年まで四度の靖国神社参拝を迎えた。

そして、これを憲法違反とする訴訟が、東京・千葉・大阪・松山・福岡・那覇の地裁で起こされ、大阪・松山では初めて靖国神社も被告の席に坐った。

阪本是丸（さかもと これまる） 一九五〇年、熊本県生まれ。國學院大學文学部神道学科卒業後、一九七九年、同大学大学院文学研究科神道学専攻修士課程修了。神社新報社記者、國學院大學日本文化研究所、助手、専任講師、助教授を経て、現在、國學院大學神道文化学部教授、博士（神道学）。専門は国学・近代神道史であるが、神社新報社編集主幹、論説主幹等を務めたこともあり、現代の政治と宗教問題などホットな問題にも関心がある。主な著書に、『明治維新と国学者』（大明堂）、『国家神道形成過程の研究』（岩波書店）、『近代の神社神道』（弘文堂）などがある。

インタビュー

高橋哲哉教授に聞く

犠牲の論理を問う

■ネット世論は『靖国問題』をどう見ているか？

広坂 高橋さんが昨年刊行された『靖国問題』（ちくま新書）は、たいへん多くの読者に迎えられ、マスコミでも賛否論論がにぎやかに語られました。僕は、このご本についてのネット上の評判を見ました。それというの『靖国問題』の冒頭で「感情の問題」をとりあげておられますが、それとは違った意味での感情問題があるからではないかと思っただけです。今回はそれをマクラにお話をうかがえれば、と思います。

インターネットの掲示板やブログは匿名でも発言できますから、はつきり言って皆さんかなり気楽にいろいろ

書き込んでいるという感じがしますが、いくつか特徴的な反応がひろえしました。一つは、これはもうぜんぜん問題にならないんですけど、本を読まないで、「高橋の本だからけしからん」というもの。（笑）

それに対して、読んだ人の反応の賛否は半々ぐらいでしようか。しかし、賛成派の中にも、「感心した」といいうながら、「どうもこの著者は何か一方的に正しいものを持ち出して決め付けてかかる風がある」というようなことを書いている人がけっこういます。つまり、高橋さんの説明には納得するけれども、その解決案として高橋さんが提案することになると、どうもみんなとまどう様子なんです。それについて高橋さんがどう感じられる

（聞き手 広坂朋信）
ひろさかともとのぶ

かということを知ってみたいのですが。

高橋 私がこの本『靖国問題』で、くわしく読まなくても誰にでもわかってもらえると思ったのは、これはさまざまなアスペクトがまじりあっていて、その複雑な問題を粘り強くときほぐしていくことが必要な問題だということ。そうしないとすぐに「感情の問題」ならざる感情的な反応に走ってしまいます。

そこで、五つに問題を分けてみました。その中の一つが感情の問題です。私はそこで、二つの対立する感情を挙げて、どちらも直視しなければいけないと論じています。それなのに、一方に肩入れしているだけじゃないかと、これだけでは片付かないんじゃないかとかいという批判がなされている。しかし、私はこの感情の問題だけで片付くとは言っていないのです。歴史認識の問題、宗教の問題、憲法の問題、文化の問題、そして国立追悼施設の問題、こういったものが全部からんでいる。感情の問題は何を論じても出てきます。例えば歴史認識の問題も感情の問題の中にもどうしても含まれていく。ただ、それらを混同しては議論になりません。そこで一つ一つ腑分けして、感情の問題に焦点をあててみれば、そこに

は感情の錬金術、靖国のシステムにとって最も本質的な感情の操作があるということを提起してみたのです。

ネット上に、一方的な立場に立っているのではないかという指摘があるということですね。しかし、私はこの問題に対しては、自分自身の意見を表明しなければならぬと考えています。靖国問題は今世論を二分して、東アジア全体をゆるがしているような大きな問題ですから、研究者としてこれについて一書を上梓するからには、私自身がどう考えるかということを示さざるをえません。これは哲学者として当然のこと、あるいは研究者として責務があると思っただけのことなのです。これまで知られていないような議論を明らかにすると同時に、その上で自分はどう考えるのかというのを出すことによって問題提起をする、それに対して読者がそれぞれどう考えるかはもちろん読者の自由です。

広坂 それから、「この著者は日本の戦争を侵略戦争だと考えているんじゃないか」とか、「帝国主義の時代の靖国神社は植民地主義と一体だったというけれども植民地主義をイコール悪と考えているんじゃないか」とか、「決めつけの上に議論をしているんじゃないか」という

反応もあります。

高橋 なるほど、しかし、軍事国家としての近代日本のあり方、日本の植民地主義がどういうものだったかということを議論しようとするは、また別に論じる必要があるでしょう。ここではあくまで靖国がどういうものであるかということに問題を限定しているのですから、あまりに多岐にわたる議論をすることはできません。ある意味で、植民地主義というものの評価をベンディングに



高橋哲哉氏

しても、例えば、A級戦犯の問題だけでは靖国の歴史は語れない、植民地主義と一体だったんだという議論そのものは、植民地主義そのものが〇か×かということと独立に成り立つはずでしょう。ですから、ここでは日本の植民地主義や戦争そのものを論じたわけではなくて、それと不可分であった靖国のシステムの問題を論じたのだという点を見ていただければと思います。

■「感情の錬金術」

広坂 「感情の錬金術」という表現は印象的で、『靖国問題』を読んだ人はほとんど覚えていると思います。この「感情の錬金術」についてありがちな反応のひとつなんですが、果たして自分の親兄弟子というような近しい人が亡くなると、靖国神社に行つたぐらいで悲しみが喜びに変わるかと、そこまでマイノリティ・コントロールは完璧じゃなかったらどうと、そこまで靖国神社に押しつけるのはいかげんなものかと、冤罪じゃないかというような反応もいくつか見かけたんですが、それについてはどうお考えになりますか。

高橋 それは全く意外な反応ですね。というのは、私の

本をきちんと読んでいただければ、そういう議論にはなっていないからです。私は、靖国という装置が遺族の感情あるいはそれを見守る国民の感情にどのような威力を持っているかを示すために、いくつかの重要な資料を引用しました。

もちろん、靖国の周辺の資料では、名譽の戦死を称揚する、顕彰する資料になっている。これは、靖国神社は今でも、自らの最大の役割として、英霊の慰霊、顕彰ということを行っているわけですから、この点に関して議論はありえないと思います。

しかし、問題はどのような建前によって、現実によくの人びとが、戦争に行くことをお祝いと称して、万歳三唱して送り出していった、そして、戦死を名譽として受け取るざるを得なかったという点なのです。

例えば「母一人子一人の愛児を御国に捧げた皆様の母の感涙座談会」(「主婦の友」誌)。これは、息子が戦死して靖国に合祀される臨時大祭の時に招かれた母が、本当におめでたいと、感涙にむせんでいる様子を示しています。ただ、この座談会の中でも、母親たちが、天皇が来てくれてありがたい、もったいない、これでもう喜んで

死ねますという感情だけでは割り切れない感情があらわ

れているという点を私は指摘しました。橋川文三はこの「感涙座談会」を引いて、「ぐちもめめしさも全くあらわれない」「語り口を愛惜していましたが、やっぱり割り切れない、やっぱり可哀相だと思う、そういうあきらめきれない悲哀の感情も出ている、ところが、それが出てくるや否や、自分たちでそれを押さえつけてしまう。『少なくともここには、遺族における悲哀と名譽の感情の葛藤が確認できるのである。』(「靖国問題」三五頁)。

高神寛昇の「靖国の精神」にもこの種の葛藤が見られます。「子供が、夫が、立派に御奉公中上げることができた喜びのと、折角大事に育てた子供を、御国のためとはいへ、不幸にも亡くしてしまったと悲しむのとは、非常に心持が違うと思います。」(「靖国問題」五〇頁)、結局は喜ぶべきだと高神は書いていますが、悲しむこともできるし、喜ぶこともできる。そこには葛藤があると、いうのは当然のことなんです。

こういう証言もあります。NHKのラジオアナウンサーで、靖国神社の臨時大祭の模様を全国に中継する仕事をしてきた人が、当時の臨時大祭で、合祀されるときに

■「感情の問題」と「感情問題」の違い

遺族の席の中から「人殺し」という言葉が聞こえてきた、そういう声をマイクに入れないために、本当に苦労したということを書いていて、私はこの本の中に引こうかと思つたほどです。これは戦後の証言ですから、どこまで信じていいのかということがありますが、それを信じるならば、靖国の合祀の場面、臨時大祭そのものの中ですらそういう声が聞こえてきた。靖国はこういう声を表面化させないための役割をもっていた。そこでそれをいわば逆手にとつて、難しいことは言わないで、悲しいのにうれしと言わなければ靖国のシステムはそれだけで機能不全になってしまうだろうと書きました。それだけで靖国問題が解決されるとは思えないという反応もあるんですが、それだけで解決されるなどとは私も全然言っていないわけでは

何度も言いますが、歴史認識の問題もあれば、その他いろいろな問題もあるわけですから、それだけで靖国問題が解決されるわけではない。しかし、感情の錬金術を本質とする靖国の機能そのものは、名譽の戦死だというような感情的な操作を、誰もがそれを受け付けない状態になれば、困難に陥るだろう、と。

広坂 もう一つ、また別の感情問題についてお聞きします。靖国問題というのは、「感情」「歴史認識」「宗教」「文化」あるいは憲法の問題と、色々と複雑に絡み合っているんだということですが、どうも、私が巷の声を拾う限りでは、例えば名譽の戦死をとげてよかったと思つている遺族の感情と、悪かったと思つている遺族の感情の葛藤の問題だと、あるいは靖国を政治利用している右派と左派があつて、その右派と左派の感情の問題、あるいは日本と中韓、日本と東アジア諸国との感情の問題だと、そういう意味での感情の問題だと思つている人も結構いるような印象です。そこで、普通の意味での「感情問題」という捉え方と、「感情の問題」という風にとらえる高橋さんとは「問題」という言葉の意味が違うだろうと思います。

高橋 靖国問題は近代日本の歴史と深く関わっています。明治政府のもとで、富国強兵策をとつてアジアを侵略をしていく過程で、日本は植民地帝国を形成し、日露戦争後、韓国併合後には、世界の列強の一員になった。靖国